

演 題	「ただいま」在宅に戻られてから見たもの
副 題	在宅復帰後の心理的・身体的変化

フリガナ	カイゴロウジンホケンシセツ ヒバリエン
施 設 名	介護老人保健施設 ひばり苑
フリガナ	カイゴフクシシ サクラモトシンジ
発表者(職名・氏名)	介護福祉士 櫻本真二
フリガナ	ヒバリエン カイゴシイチドウ
共同研究者	ひばり苑 介護士一同

【はじめに】

「自宅で生活するということ」…この極当たり前の願いを叶えられない高齢者を私達はこれまでにどれだけ見てきただろうか。老健という在宅復帰を目的とした施設でさえも、特養待機による長期入所や体調不良に伴う入退院等を余儀なくされる利用者も多く、なかなか在宅復帰が進まないのが現状である。

「家に帰りたい…」その願いを叶え、様々な問題を抱えながらも、その人らしく自宅で生活されている方の心理的・身体的な変化の事例を介護士として関わった内容と共にここに報告する。

【事例紹介】

A様 83歳 女性 要介護度2

既往歴：高血圧、変形性膝関節症、

アルツハイマー型認知症、右足骨髄炎術後
性 格：おしゃれ好きで社交的、自己主張がはっきりしている

家族構成：本人・夫・長男・次男・長女の5人家族
本人と夫の二人暮らし（長女が協力者）

趣 味：歌、手芸、俳句、パチンコ

【入所までの経緯】

H28年春頃からA様に金品に関する被害妄想が出現し、日常的に夫との喧嘩が絶えなくなった。このままでは自宅で暮らしていくことが難しいのではと家族が心配し精神科を受診。結果、アルツハイマー型認知症（入院時HDS-R 17点）との診断を受け、薬の調整と夫とは距離を置いて様子をみる必要があるとの判断があり入院となった。約3ヶ月間の入院加療の上、穏やかに生活していたが、退院に向けて1泊の外泊を試みたところ、お互い感情のコントロールが難しく衝突する結果となった。退院後に夫との2人暮らしではA様の認知症を悪化させる恐れがあると考え、穏やかな生活を第一の目標として特養待ちで当苑の入所に至った。（入院中車いす使用）

【入所時の様子】

（心理面）他利用者との交流は盛んで趣味の手芸にも取り組む。職員は出来るだけ本人の好きなことができる環境を設定。他利用者の言動を気にすることもあるが生活上トラブルはなく被害妄想等の症状もない。施設生活の様子を夫や長女らに伝達し、家族

が本人の心身状態の理解を深められる時間を大切にしました。

（身体面）動作時ふらつきがなかった為、移動はシルバーカーを使用し自立度が向上。右下肢に痛みがあるものの生活動作は安定した。心身状態が安定し始めたことを機に、家族との時間の再構築のため、徐々に外出・外泊の回数を増やした。外出中、夫との喧嘩もなく、家族側の本人の受け入れも良好となり、家族としても自然な流れの中で、本人の希望である在宅復帰が叶う結果となった。（入所期間計4ヶ月、退所時HDS-R 27点）

【在宅復帰後の様子及び変化】

（心理面）週1回当苑のデイケアに通いつつ、夫の農作業や庭仕事の手伝いをしたり、夫と協力し合っただけの家事や調理への参加、趣味の手芸やパチンコ等、自分のやりたい事を行うことができている。農作業が忙しいと、デイケアをお休みする日もあるが、精神的にも落ち着いて在宅生活を送ることができている。夫との関係性も良好である。現在は、地区の行事にも進んで参加し、化粧やアクセサリーを身につけて外出する等、身なりへの配慮もできている。

（身体面）自宅に戻られたことで、生活の中での活動量が自然と増え、体力の向上に繋がり、シルバーカー歩行から杖歩行へ改善。また、自分の好きなことができる自宅という環境にあることから、気力も溢れている。

【おわりに】

A様は、在宅復帰後、自由に自分の好きなことに取り組みされており、人生を謳歌している印象が伺える。在宅生活を目指す上で必要だったA様を支える為の“理解の輪”が家族や職員の中で徐々に出来始め、「家に帰りたい」という本人の願いを叶えることができた事例だった。“古い”や“生活環境”により自宅で生活するという当たり前のことが変化せざるを得ない状況になったとしても、最期の時まで本人の希望を汲みとり、諦めずに支援できる介護士でありたいと感じた。

利用者ひとりひとりが望む生活の場に、笑顔で“ただいま”と戻れることを願って…。

